

アナキズムとの出会い 高橋力也

私は読書が嫌いだった。幼い頃から本を読みなさいといわれて育った。しなさいと言われるとやりたくなくなる性分なので本は絶対読まなかった。しかし、休学するようになってから読むようになった。なにせ暇だったからだ。大学の授業もないしコロナ禍で人と会うのもままならないため時間がありあまっていた。一九年間本を嫌って生きてきたはずなのに読んでみると案外面白くてどハマリした。他人の考えや思いに文字を媒介として触れることが楽しかった。自分が知らなかった事に会うことで好奇心を刺激され、興味の赴くまま本を買い、むさぼり読んだ。知ろうとすればするほど、知らない世界が増えていく。

こうして知的快楽に身を任せながら本を読んでいく中である一冊の本に出会った。栗原康の『アナキズム―一丸となってバラバラに生きろ』だ。みなさんはアナキズムを知っているだろうか？私はこの本を読むまで知らなかった。アナキズムとはどういうものか、この本に拠って説明してみる。アナキズムの語源はギリシア語の *anarchos* からきていて、接頭辞の *an* (アン) と *arche* (アルケー) がくっついてできている。そしてこのアンが「〜がない」という意味で、アルケーが「支配」や「統治」を意味している。アンアルケー(支配がない)でアナキーだ。このアナキーに「〜主義の」を意味するイズムをくっつけてアナキズムになる。一般的には「無政府主義」と訳されることがあるが、政府だけではなくあらゆる支配、統治から自由であろうとするのがアナキズムである。

私はこの本を読んでからというものすっかりアナキズムに魅了されてしまった。自分が日ごろから思っていた社会への違和感や反抗心を言語化してくれることが嬉しかった。もっとアナキズムを知りたい、感じたい。そう思い、まず著名なアナキズムの理論家である大杉栄の文章に触れた。大杉栄は一八八五年生まれのアナキストで、一九二三年の関東大震災の混乱のさなか甘粕正彦率いる憲兵隊に虐殺されるまでの三十八年間数多くの文章を書き日本の労働運動に多大な影響を与えた人物だ。大杉の残した「生の拡充」と「自我の棄脱」の二つの文章が私自身のアナキーな側面を私に知覚させてくれた。

「生という事、生の拡充という事は、いうまでもなく近代思想の基調である。近代思想のアルファでありオメガである。しからば生とは何か、生の拡充とは何か、僕はまずここから出立しなければならぬ。生には広義と狭義とがある。僕は今その最も狭い個人の生の義をとる。この生の神髄はすなわち自我である。そして自我とは要するに一種の力である。力学上の力の法則に従う一種の力である。力は直ちに動作となって現れねばならぬ。何と

なれば力の存在と動作とは同意義のものである。従って力の活動は避け得られるものでない。活動そのものが力の全部なのである。活動は力の唯一のアスペクト「外観」である。さればわれわれの生の必然の論理は、われわれに活動を命ずる。また拡張を命ずる。何となれば活動とはある存在物を空間に展開せしめんとするの謂にほかならぬ。けれども生の拡張には、また生の充実を伴わねばならぬ。むしろその充実が拡張を余儀なくせしめるのである。従って充実と拡張とは同一物であらねばならぬ。かくして生の拡充はわれわれの唯一の真の義務となる。われわれの生の執念深い要請を満足させるものは、ただ最も有効なる活動のみとなる。また生の必然の論理は、生の拡充を障礙せんとする一切の事物を除き去し破壊すべく、われわれに命ずる。そしてこの命令に背く時、われわれの生は、われわれの自我は、停滞し、腐敗し、壊滅する。」(大杉栄「生の拡充」『近代思想』一九一三年七月号、飛鳥井雅道編『大杉栄評論集』岩波文庫)

私たちの生は本来誰にも止めることはできない大きな力のはずだ。しかし、陳腐なルールに束縛され、他人の生を生きることを強いられる。自分の生が貶められる。自分のしたいことを邪魔するものは徹頭徹尾破壊しよう。そうしないと自分の生が萎れて死んでしまう。自分の生を殺してしまうようなルールなんていらぬ。資本主義経済が高度に発達した現代では働かないと世間からはじかれてしまう。働かないことは悪で、役に立たないといと切り捨てられてしまう。カネがすべての物事の尺度になる。働かざる者食うべからず。好きな事を好きなだけやろうとすれば世間からは猛バッシングだ。私は適度に働いて小銭を稼ぎつつ、好きな本を買って読んだり、博物館や美術館に行つて古今東西の事物に触れたりして生活していきたい。好きな時に好きなだけ働いて、好きな事を好きなだけしたい。自分の生を拡張させて充実したものにしていききたい。

「兵隊のあとについて歩いて行く。ひとりでに足並みが兵隊のそれと揃う。兵隊の足並みは、もとよりそれ自身無意識的なのであるが、われわれの足並みをそれと揃わすように強制する。それに逆らうにはほとんど不断の努力を要する。しかもこの努力がやがては馬鹿々々しい無駄骨折りのように思えて来る。そしてついにわれわれは、強制された足並みを、自分の本来の足並みだと思ふようになる。われわれが自分の自我―自分の思想、感情、もしくは本能―だと思つている大部分は、実に飛んでもない他人の自我である。他人が無意識的にもしくは意識的に、われわれの上に強制した他人の自我である。百合の皮をむく。むいてもむいても皮がある。ついに最後の皮をむくと百合そのものは何にもなくなる。われわれもまた、われわれの自我の皮を、棄脱して行かなくてはならぬ。ついにわれわれの自我そのものの何にもなくなるまで、その皮を一枚一枚棄脱して行かなくてはならぬ。このゼロに達した時に、そしてそこから更に新しく出発した時に、はじめてわれわれ

の自我は、皮でない実ばかりの本当の生長を遂げていく。」(大杉栄「自我の棄脱」『新潮』一九一五年五月号、飛鳥井雅道編『大杉栄評論集』岩波文庫)

自分の意志で積極的に行動していると思っても無意識のうちに他人の思い通りの動きを演じていることがある。百合の皮をむくようにどんどん自分の皮を脱ぎ棄てていつか何にもなくなった時に初めて本来の自分に出会うことができる。そこで出会う自分はこれまででできなかったことができるようになり、以前とは違った生物に変化する。ゼロに戻って再構築。スクラップアンドビルドだ。仮初めの自我はいらない。自分の生を生きたい。

コロナ禍に見舞われ、大学の授業がオンラインになってしまった時に、自分が本当になりたいことが何なのか真剣に悩んだ。考えに考えても答えが出ず、自分はいったい何のために大学に通っているのか分からなくなってしまった。そのため一度大学を離れ、自己と向き合うことにした。そしてアナキズムの思想に出会い、自分の好きなことが見つかった。本嫌いだっただのに本が好きになり、文章を書いたことがなかった私がこうして文章を書いている。これだけで、この事実だけで十分である。私はこれからも自分の生をどこまでも拡張し充実させ、本当の自我を成長させていきたい。それには大きな苦痛を伴うだろうし、果てには死んでしまうかもしれない。それでも大杉栄の思想を胸に抱き、闘い続けたい。自分のしたいことしかしたくないし、他人の生を黙って生きるくらいなら自分の生のために命を燃やしたい。自分の生を生きていく。アナキーを生きていく。